



終末の文学は路傍の石となるか

『美しい星』執筆時、世界中の人々が、米ソの核の傘下で冷戦からベトナム戦争そしてキューバ危機と、時代を覆う終末観とともに日常を暮らしていた。三島由紀夫は、「終末と文学―水爆戦争の時代に生きて」（『毎日新聞』一九六二年一月四日夕刊）において、核の脅威に晒されている日常生活を小説化する困難について興味深い見解を示している。

いはゆるいきいきとした具体性、かつて小説家の手の内で羽ばたいてゐた生活の具体性は、今日の終末観を宿さない限り、路傍の石ころのやうな、世界から見離され

た、孤立した具体性に変貌してしまつた。しかも彼が、現代の終末観を投影しようと試みると、すべての具体性は死に絶え、冷たい概観的な図式的な世界認識が彼に襲ひかかるのだ。

『美しい星』において、違ふ星の異星人でありながら、身体的には最も近い肉親であるというアンビバレントな大杉一家を設定した理由の一つは、「共同体の終末」とも言える状況から登場人物たちを出発させることで、新しい「生活の具体性」を創造しようという野心的な試みがあつたからかもしれない。

大杉家は飯能^{はんのう}（埼玉県）一の材木商だつた先代の遺産で暮らしており、生産的な活動が見えない異端の家として、「飯能」という地域共同体の中では浮いた存在だ。「惑星間の会合」と語り手が称したように、大杉家では血のつながった家族（血族）であることは重要視されず、「地球人ではない」宇宙人としての自負により連帯し結束していた。各人は別々の星の出身だと自認し、互いに精神的には他人であるとの認識がある。「生活の具体性」どころか、虚構に虚構を重ねた「疑似家族」の生活こそが実態なのである。

だがその大杉家にも危機が訪れる。「空飛ぶ円盤」が「家族四人の目に、いつも特殊な状況を選んで、個々別々にし

か姿を現さなかった」ことにより、宇宙人としての自意識によりつながっていた「家族」のアイデンティティが揺らぎ、各人の孤立が深まっていったのである。互いに自分が宇宙人であること、すなわち「家族」の一員であると自己証明ができない状況に陥ったことにより、大杉家のすべての人々は、お互いが本当に宇宙人なのか最終盤までわからない不確定かつ不安定な生活を送ることになる。肉親でありながら、同じ宇宙人でありながら、互いの実存への懷疑が深まって行く作品構成となっているのだ。

もし、『美しい星』の解釈において、この「宇宙人」という奇抜な設定を常識の内に読み替え、登場人物たちの妄想であり内面の孤独の象徴と看做す^みならばどうか。大杉家の家族間の孤立状態は、「それは彼らがそれぞれ内なる天体に閉ざされているからにちがいない」(田中美代子)と^①いった、心理学的な問題に縮小化するだろう。しかし、家長の重一郎はあくまで宇宙人として家族と対話し、時に行動を起こすことで、結果的には「ミクロコスモスたる家庭の崩壊」(田中)に終わらせない、新しい家族のビッグバンを引き起こすこととなる。

たとえば「宇宙」からの指令を受けた当主の重一郎が、一家総出で「羅漢山」に登り、円盤を待ち受けるエピソードがある。はたして円盤は現れないのだが、この失敗エピ

ソードもまた、大杉家ビッグバンの伏線だと考えられるだろう。

今まで熱してゐた四人の心の中に、死んだ天体に吹きまくる風のやうな冷気が吹き込み、俄かに四人がめいめいの孤独の片隅へ突き飛ばされたやうな感じを味はつた。たえず琴の音のやうに彼らの内に鳴りひびいてゐる諧和と統一感が、ふと絃が切れて音を発しなくなつたやうな気がしたのである。^②

円盤をともしに見られないまましていると、家族の「統一感」が失われ、やがて互いへの疑惑から家族の崩壊と各人の孤独を招く事態になる。この未来に抗うからこそ、重一郎は家族がともに円盤を見ることができるよう挑戦し続けるのである。重一郎が目指したのは、血筋ではなく同じ惑星でもない、共通の体験を軸にした新たな統一体であるところの家族(共同体)にほかならない。

制度としての「家族」、また血脈でつながる血族としての「家族」が原理的に抱え込む虚構性を踏まえたうえで、大杉家という新しい家族モデルを肯定的に小説に取り入れたところに、自らも旧家の家族制度を生きた三島のニヒリズムのポジティブな発露をみることができ^③るだろう。